

# サンパウロにおける韓人達の食文化研究

李 徳雨

(歴史民俗資料学研究所 博士後期課程)



2013年2月17日(日)から3月9日(土)まで、非文字資料研究センターの派遣研究員としてブラジルのサンパウロ大学日本文化研究所を訪問した。そしてサンパウロに住んでいる韓国人移民者たちの食生活全般についての調査、特に食べ物に関しての適応と変化という過程の中で、彼らの認識を中心に資料収集と聞き取り調査を行った。

## 1. サンパウロにおける韓人(韓国人移民者)

「移民」をする人々を日本語では移民者、日系人といい、韓国では移民者、僑胞、同胞、韓人と呼ぶ。また、韓人達が意見の交換や共同体を形成する環境などを韓国語では「韓人社会」と呼んでいる。ブラジル韓人移民の歴史は、今から50年前に始まった。公式な移民の歴史は大韓民国政府樹立以後の1962年から政策によってブラジルへの移民船が釜山から出発したことを想定している<sup>1</sup>。1962年1月に「文化使節団」という名称で移民してきた15人が彼らであり、そこから2013年を「ブラジル韓人移民50周年」と銘打った。現在、約6万人余りの韓人がブラジルに住んでおり、サンパウロでは2万5千人程度が住んでいる。筆者が訪問したサンパウロでは「ブラジル韓人移民50周年」の準備で慌ただしい雰囲気であった。



図1 韓人移民50周年記念式

<sup>1</sup> 実は植民地時代に日本の船に乗せられて来た何人かの韓国人がいたが、この人々は「日本国朝鮮」の書類を持参したということで、今の韓人社会では歴史として入れてないそうである。この点に関してはまたより深く検討する必要がある。

## 2. 韓人達の食文化

滞在は3週間と短く、50余年間の韓人達の食生活を記録することは簡単なことではない。そして個々の空間と共同的な空間が共存する食生活を同時に記録し、分析するためにはある程度の基準を決めないと難しいため、筆者はすべての情報提供者に対し必ず行った質問があった。それは韓国の代表的な食べ物であるキムチ(白菜、唐辛子粉、塩)、白いご飯(米)、味噌(大豆)などの食べ物を基準に、移民初期にどのようにこれらの食べ物を食べたのか、そして今では、どのように食べているのかという質問であった。韓国人にとって、上記の3つの食べ物や食材は、他のものに比べて最も多く消費されているものである。筆者は、移民初期は、これらの食材や食べ物を手に入れることが難しく、量的な問題があったと推測してこのような質問をしたところ、意外な答えを聞いた。まずキムチの場合は、韓人より先に定着した日系人たちが白菜、大根などの野菜を流通させていたので、彼らのおかげでキムチを作ることはあまり難しくはなかったとのことである。これは、味噌、ご飯も同じであった。韓国より移民の歴史が50年ほど長い日系人が作って流通させていた味噌、醤油を入手することができ、日系人の農場から米や野菜などを買って食べることもできた。つまり、日系人のおかげで韓人たちは移民初期の食生活に余り困らなかつたという話である。また、同じ東洋人という共感もあり、お互いに仲良くしていたという話も聞くことができた。

そして基本的に肉食を中心とするブラジルの食習慣は、韓人達の肉食回数を増加させることになった。韓人のブラジル移民初期当時の韓国では、肉を食べることは非日常の食事であったが、ブラジルに移民した後、低価格で食肉を入手することができ、肉を食べる機会も増えたという話は移民たちの共通の話であった。また、ブラジル料理と韓国料理の文化変容の中でも食べ物に困ったことは特になかったという。1960年代の韓国では、端境期で食糧を簡単に手に入れることは難しかった時代であった。このような韓国から離れて、ブラジルに移民を決めた当初の韓人達は、豊かな食生活をする事ができ、



図2 お店の韓国料理

このおかげで彼らは生業に集中することができた。したがって、日本より50年以上遅れた移民の歴史にもかかわらず、最近、ブラジル国内の様々な産業に韓人達が多

く進出し、ボンヘチロにはコリアタウンが形成され、ファッションの中心街と呼ばれている。

そして韓国料理の店は、韓人達が集まることができる場所として、情報交換の場でもあり、集会の場所として使用されている。現在ボンヘチロには数十店舗の韓国料理専門店があり、100店舗を超える韓人経営の衣服店がある。また筆者がボンヘチロに行った際、あちこちから韓国語が聞こえ、まるで韓国にいるような印象を受けた。

このように、ブラジルのサンパウロにおける韓人達の食生活に関する認識は、家庭食から外食まで様々な変化、適応の過程でみることができる。50年以上が経つ韓国移民史から考えると、ブラジル韓国移民者達の研究は少ないと思われる。今回の調査を予備調査として、これからの研究をさらに進展させていきたいと考える。

## 海外提携機関との招聘・派遣事業について

本センターは、21世紀COEプログラムの後継組織として、海外の9つの研究機関と提携して、国際的な感覚を有する次世代の若手研究者の育成を目的とした研究者の招聘・派遣事業を進めている。21世紀COEプログラム以来の10年間で、訪問研究員は49人、派遣研究員は25人を数える。これら若手研究者の研究課題は、歴史、宗教儀礼、民俗祭祀、伝統芸能、民間演劇、陶芸、写真、レコード産業、無形文化財、風刺画、寺社おふだ、出稼ぎ労働、ジェンダー、住宅建築・都市建築、食文化など実に多様である。3週間の短期滞在ではあるが、若手研究者の一義的な目的である資料・研究文献の収集においては派遣先各機関で蓄積された資料の多様性と奥深さが実感されており、また指導教授・大学院生との知見交流は研究員の新たな研究視点の開発に役立っていることが報告されている。本センターでは、指導教授による研究指導、チューターによる研究支援、滞在期間終了時の報告会をとおして、このような招聘研究員の活動実態と研究成果の把握に努めてきた。一方、派遣研究員については、今回初めての試みとして、「2012年度派遣研究員報告会」(2013年4月5日(金))を企画し(写真)、派遣研究員である4人の院生から、提携機関における受入れ体制(人的・物的環境)、現地の生活環境(交通、食事、宿舎)、

研究成果の自己評価、今後の派遣研究員へのアドバイスなどの諸点について報告をいただいた。センター側からは、田上繁センター長、鳥越輝昭・内田青蔵両研究員(国際交流担当)が参加し、活発な意見交換が行われた。元々多様な広がりをもつ非文字資料は、各国の地域文化の諸相を具体的かつ可視的に示す絶好の資料であるとともに、資料自体が多層的な時間・空間における蓄積を背景としていることから、その研究方法としても比較歴史的視点を求めるものであるが、招聘・派遣制度は、そうした研究交流実践の一端を担っているということができる。派遣研究員の資格は、2012年度より、5つの大学院研究科博士後期課程の在籍者に拡大されており、多様な研究テーマをもった院生の応募が期待されている。(非文字資料研究センター事務室)



2012年度派遣研究員報告会